

「これからの森林教育 ～子どもたちの心に森を育てる」

コーディネーター

和歌山大学観光学部教授

大浦 由美

おおうら・ゆみ

埼玉県ふじみ野市生まれ。信州大学農学部および同大学院農学研究科修士課程を修了後、名古屋大学農学部、同大学院生命農学研究科を経て、2008年から和歌山大学観光学部准教授、15年から現職。専門分野は森林経済学、観光学。「交流で育む豊かな森・里・人の暮らし」をテーマに、「地域資源管理における多様なパートナーシップの形成」「森林空間を総合的に活用したツーリズム」などの視点から研究教育を行っている。また、本学部の実践型教育の一環として「地域連携プロジェクト」にも携わり、和歌山県有田川町沼地区における棚田保全活動をはじめ、県内各地で観光振興や地域再生に関わる域学連携活動を行っている。



日本において、小中学生を含む一般の人々を対象とした森林・林業教育への関心が高まったのは、1990年代のことです。92年の地球サミットを契機に「持続可能な森林経営」が国際目標として掲げられ、環境教育の推進が政府の重点施策となりました。また、学校教育においては知識偏重から「生きる力」の育成への転換が図られ、「総合的な学習の時間」の導入が森林教育の広がりを後押しすることになりました。現在では、森での体験活動に加え、木材に親しむ木育の取り組みや、自然の中で子どもたちが日常的に過ごす「森のようちえん」など、より多様な教育実践活動へと発展しています。

一方、雇用の不安定化に伴う経済的な格差の固

定化、中間層の脱落などを背景に、経済的・地域的な体験格差が指摘されるようになっていきます。また、都市化や保護者の多忙化、デジタル機器の普及などにより、子どもたちが自然の中で身体を使って遊び、他者と関わり、五感で学ぶ機会が減少しているとも指摘されています。だからこそ、幼児教育や学校教育、あるいは地域での活動を通じて、すべての子どもが自然とふれあい、感じ、考える経験を社会として保障していくことが、今あらためて求められています。

これからの森林教育において、私たちが今なすべきことをともに考えていきたいと思います。

「これからの森林教育 ～子どもたちの心に森を育てる」

パネリスト

マルカ林業株式会社山林部課長

浦西 大樹

うらにし・だいき

和歌山県有田川町(旧清水町)生まれ。2001年に地元企業であるマルカ林業株式会社に就職。山林での作業や管理の仕事に従事しながら、会社の方針で森林環境教育を始めるため、北欧発祥の森林環境プログラムを実践しているLEAFローカルインストラクターの資格を取得。13年から現在まで1,000人以上の子どもたちに気づきと共有を意識した、北欧の森林環境教育プログラムを実施している。23年からはLEAFローカルインストラクターを目指す人向けの研修会の講師として活動し、LEAFの普及啓発にも携わっている。また、環境教育以外でも管理山林の隣接所有者にプランナー活動を行い、17年には森林施業プランナーの資格を取得。24年には和歌山県指導林業士の認定を受けるとともに、同年に森林総合監理士試験に合格。現在は他の従業員とも協力し、林業部門の管理者として日々業務にあたっている。



私たちの仕事は木を育て収穫し、また一から苗木を植え、育てていくことです。森林は、長い年月をかけて育てていく過程で適切な管理をしなければ、災害を引き起こしてしまいます。また、苦労や費用をかけて育てても、収穫した木材が適正な価格で売れなければ林業は生業としてなりたちません。そこで大事なのは未来の消費者である子どもたちに、森林や木材を身近に感じ、触れてもらい、木の良さを理解してもらうことです。大人になったときに、「森林体験が楽しかったな」と思い出して、木材を使って商品を作ってみたり、子どもを山に連れて行って遊ばせてみたり——。そんな風に、少しでも森林や木材と関わりを持ち続ける大人になってくれたらと願って

います。そのために、森林体験に来ていただく一日が特別な思い出になるようなアクティビティを考えています。

また、弊社が管理している山林には、スギ・ヒノキの人工林はもちろんですが、天然林も多く存在しています。天然林には標高や場所の違いによって、様々な樹種があります。現在はコナラを使って薪生産、カシ類等で備長炭を生産し販売していますが、天然林の活用として、森林環境教育のフィールドはもちろんのこと、広葉樹やモミ・ツガの販売も企業として考えていくべきだと思います。

「これからの森林教育 ～子どもたちの心に森を育てる」

パネリスト

和歌山県森林インストラクター协会会长、
NPO法人根来山げんきの森倶楽部事務局長

岡田 和久 おかだ・かずひさ

和歌山県高野町生まれ。車も通れない山の中で生まれ、森の気配を肌にまといつつ育つ。大学で林学を学び、林業職で和歌山県庁に入庁。仕事の傍ら、森林インストラクターとして県内各地の森を案内してきた。県立森林公園根来山げんきの森の設置を機会に1999年「根来山げんきの森倶楽部」を設立。以来、ボランティア仲間とこの里山公園を管理するとともに来園者に里山に触れ合う機会を提供してきた。また、2008年から県内の森の魅力と役割、そして森が抱えている様々な問題点について1年を通して学ぶ「わかやま森づくり塾」を主宰。毎年20人の塾生とともに県内の森を見つめている。18年、103年ぶりにサクラの新種として発表されたクマノザクラの保護と利用を目的に設立された「一般社団法人日本クマノザクラの会」の理事としてクマノザクラの普及に努めるとともに、龍神温泉近くにクマノザクラを中心とした広葉樹林の復活に取り組んでいる。



緑に覆われた和歌山県は自然豊かな土地だと思われています。ところが、一歩その豊かなはずの緑の中に踏み込んでみると、森が内包するいくつかの問題点が見えてきます。

一つ目は管理が不十分な人工林が大きく広がっていること。木材を育てるために植えられたスギやヒノキは、適切な間引き作業を怠ると崩れやすく、水を育みません。すると多様な生物が暮らせない森となり、私たちの暮らしに大きな負荷をかけます。

二つ目は竹林が拡大していること。紀伊半島にとって現在植生している竹は外来種。放置された竹林は広がり続け、里山の生物を駆逐しています。

三つ目はニホンジカの食害により、森が衰退し始

めていること。特に食害の激しいブナ林などでは次世代を担う若木が育たず、やがて和歌山県からブナ林が消えてしまうことも危惧されています。

四つ目は里山が成熟し、かつて私たちが身近に触れ合っていた生きものたちが消えていくこと。里山の成熟は自然が豊かになっていく一面でもあります。スミレの仲間やササユリなど明るい環境を好む生物が減少しています。

私たちには次世代により良い森を届けるために、今、森が抱える問題を改善する責任がありますしその力もあります。一人一人の力は小さくとも、これを集めることで少しでも良い森を回復させていきたいものです。

「これからの森林教育 ～子どもたちの心に森を育てる」

パネリスト

manma place 共同代表
(めぐみと森のようちえんの運営団体)

佐道 匡子 さどう・まさこ

大阪府堺市生まれ。日本料理屋を営む両親の下で育ち、料理の魅力や、美味しさが人を幸せにする力を知る。大学卒業後、公立小学校の高学年を対象とした学童保育の現場で3年間責任者として勤務。その現場で、自信や意欲がない子どもたちと日々向き合い、大人のあり方や子どもへの関わり方次第で子どもが変わることに気づき、大人が変わらないと子どもが変わらないことを痛感した。第一子を子育て中に、子どもを真ん中にした育ちの場を作りたいと思い立ち、パートナーと共に2016年から森のようちえん活動をスタート。17年から任意団体manma placeを立ち上げ、和歌山県立森林公園根来山げんきの森をメインフィールドとした認可外保育事業「めぐみと森のようちえん」、未就園児親子向けのプログラム「おさんぽクラス」「アートクラス」など、子どもと子どもを見守る大人を対象とした事業を展開している。



日々変化する森で育つ子どもたちは、感受性が育っているように感じます。また、一日中、野いちごを探したり、鬼ごっこをしたりして、6キロ歩く日もあり、体力や体幹も培われています。さらに、気候など自分ではどうにもできないことに日々触れるうちに、自然への畏敬の念が育まれ、折り合いをつける経験も重ねています。とはいえ、一足飛びに森を人の能力を育てる場所としてしまうのは傲慢な気がします。何でもすぐに知ることができて、手に入る時代にあって、たしかに森は感性や自然観・人間観が育つひとつのきっかけになるでしょう。重要なのは森とどう向き合うかで、森で育つ力ばかりに目がいってしまうのは、時代から求められる便利さやスピード感に巻き

込まれているような気がします。まずは森で深呼吸して、耳を澄ませて、風を感じる。そんな時間が必要ではないでしょうか。

今の子どもたちは、暇を感じる、遊びを探すなどの〈余白〉が、子どもの将来を心配する大人によって〈習い事〉などによって埋められ、「子ども時代」を全うすることが難しい状況にあります。けれど森では、様々な生きものや植物に出会い、感じること、愛でること、森に集う人とつながり合うことができます。その営みを広げることが、思い合う優しい社会の実現につながると私は信じています。

「これからの森林教育 ～子どもたちの心に森を育てる」

パネリスト

三重大学学長補佐・教育学部教授

平山 大輔

ひらやま・だいすけ

広島県福山市生まれ。2005年、大阪市立大学大学院理学研究科後期博士課程を修了し、博士(理学)の学位を取得。09年、三重大学教育学部理科教育講座に着任。専門は森林生態学で、カシ類を中心とした樹木の生態や生存戦略などについて研究している。教育では、小・中学校の教員養成に携わる一方で、三重県等と連携して森林教育の取り組みを進めてきた。また、科学技術振興機構の次世代科学技術チャレンジプログラムの採択を受けて三重大学が実施している「三重ジュニアドクター育成塾」の代表を務め、小・中学生の自由研究の支援を行っている。おもな著書・翻訳書に「つし自然ガイドブック 知ろう・歩こう・津市の自然」(共著)、「生態学 個体から生態系へ」(共訳)、「ワークブックで学ぶ生物学実験の基礎」(共訳)などがある。



森林を未来に残していくためには、人と自然の関わりを見つめ直し、その大切さを次の世代に伝えていくことが欠かせません。もともと森林教育は林業に関する学びが中心でしたが、いまでは持続可能な社会をめざす教育(ESD)としての広がりがみられ、学校での実践も重視されるようになってきました。私は生態学の視点から、生きものとしての木のおもしろさや、多様な生きものが暮らす場(生態系)としての森林のおもしろさを、学校での森林教育の入り口にしたいと考えています。

とはいえ、学校で森林教育を進めるのは簡単ではありません。先生方は多くの仕事を抱えていて、時間や予算も限られています。「大切だからやるべき

だ」と一方的に進めても、勝手な押しつけになりかねません。

これまでに、県や小学校と連携し、校庭の木を使ったり、理科・社会・国語など既存の教科にある森林に関連する内容を活用したりすることで、無理なく取り組める教科横断的なアプローチの有効性を明らかにしてきました。

最近では、自治体で森林教育のビジョンや計画、教材などが整備されるようになってきました。これは前向きな動きですが、成果を急ぎすぎないように注意が必要だと思っています。森林教育の成功には、短期的な成果を求めて失敗しがちな私たちの社会の弱点を自覚し、「待つ」ことが何より大切です。